

馬氏氏祖金銀

しまおとしお ぜんしゅうだい かん
島尾敏雄全集 第2巻

一九八〇年五月二十五日初版

一九八〇年七月一〇日二刷

著者 島尾敏雄

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―一―二一

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六一六二七九九

堀内印刷・美行製本

© 1980 Toshio Shimao

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

島
尾
敏
雄
全
集

第 2 卷

晶文社

はまべのうた	7
孤島夢	24
肉体と機関	32
石像歩き出す	55
蜘蛛の行	64
摩天楼	74
単独旅行者	83
島の果て	157
夢の中の日常	187
徳之島航海記	211
月下の渦潮	258

挿話

葉

勾配のあるラビリンス

格子の眼

361 341 323 295

ブックデザイン

平野甲賀

はまべのうた

——あしたはまべをさまよえば昔のことぞ偲ばるる——

みんなみのある小さな島かけにウジレハマとニジヌラと呼ぶ二つの部落がありました。二つともあんまり大きくないさびしい部落でしたが、ウジレハマの方には役場だの分校だの郵便局などがあって、いくらかにぎやかなのに引かえて、ニジヌラには十軒ばかりのどれもこれも至って貧しい民家があるばかりでありました。この二つの部落の間にはくちばしのように海につき出た岬が横たわっていて、どちらからもお隣りの部落は見えませんでした。しおがずっとひいた時には岬のはなをいそ伝いにぐるっと廻って行くことも出来ました。そうすると大へん時間がかかるので、大ていは岬ののどもとの小さな峠を越して往き来をして居りました。小さいながらも赤土の歩きにくい急な坂や道を横切つて流れている小川などを通して峠の上に出ると、眼さきはからりとひらけて近くの島の山々は幾重にもむらさき色にかさなり、遠くの島かけは心に遠くうす墨ではいたようになたの水平線に浮び上つ

てまるで絵のようでありました。そして片方のふもとにはウジレハマが反対の方にはニジヌラが箱庭みたいになっぽけになって見下せるのでした。かせのあるときには立さわぐ潮騒や蜂の松籟が子守唄のように峠に立った人々を夢の気持にさせるのでした。お月夜のぼんなどにはこの二つの部落はまるで青い青い水底に沈んでいるようでありました。浜辺にはアダンゲやユナギの葉がぐれに南の海が静かに波打つてときどき青い夜光虫が光って居りました。どの家もどの家も外からはのぞけないように高い竹垣をたてめぐらしてあるので、誰かがどこかの家にはいろいろと思えば迷路のようにぐるぐる垣根の道を廻って行かなければならなかったのです。部落の通りみちはそれこそ猫の子一匹通らないほどひっそりとなって月の光がしたたるようにこぼれているのでした。ときおり垣根の中から子供たちの笑い声がころげ出してくるのではじめてこの部落にも人が住んでいるのだろうと思われる程でありました。それでもウジレハマの方は人家が多いだけにニジヌラほどさびしくはなかったのです。

さて、いつの頃だったかそのさびしいニジヌラの部落の近くにへいたいさんが沢山やって来て、かえってニジヌラの方が賑やかになってしまったことがあります。

はじめは、ニジヌラの人たちはへいたいさんが畑のおいもやさとうきびをあらしはしないだろうか、むりなんだいをふきかけて来てこまらせはしないだろうかと心配して、主だった人たちは毎晩のように部落の親方のニジさんの家を集って来てはランプの灯かげに額をよせあつめて居りましたが、へいたいさんたちは一向にそんなようすもなく昼間も夜中も一所懸命に何かお仕事をしているようでありました。機械をうごかす音、金や木をたたたくひびきなどが入江一ぱいにこだまして、ニジヌラは、一

べんに文明がおしよせて来たような思いがしました。ニジヌラの赤ん坊たちは夜中になんべんも眼をさましては泣き出してお母さんたちを困らせていました。でもすぐにそんなもの音にはなれてしましました。そしてニジヌラの子供たちは自分たちの部落がウジレハマと同じようににぎやかになったことが自慢になって来ました。

或日親方のニジさんの家の庭に立派な軍服を着た人が二人やって来ました。そして眼の大きな方の若い軍人が「私は隊長だ」と言いました。そして「ニジヌラからウジレハマに行く峠道はあさってから通ってはいけない」とそれだけ言うと、さっさと帰ってしまいました。

さあ、大変です。はじめに心配したことが本当になってしまったのです。おとなはまずよいとしても毎日毎日ウジレハマの学校に通う子供たちはどうすればよいのだろうか。ニジヌラの人たちはみんなニジさんの家を集って来て、とにかく別な道を作らなければならぬことに相談がまとまりました。そして早速部落の者総出で急な谷間に道をつくり出しました。はじめはみんないやいやながら仕事をしていました。段々身体に汗が出て新しい道がどんどん出来始めると大へん愉快になって来ました。中休みに一服する時には誰もがにこにこ笑って早く道をつけて子供達が一日も早くウジレハマの学校に行けるようにしようと言いました。

こんな風にしてニジヌラの人たちは兎にも角にも新しい道をどうにか作りあげてしまったのです。ところで、ニジヌラの子供たちは新しい峻しい道を前の二倍も三倍もの時間をかけて毎日ウジレハマの学校に通わなければなりません。ニジヌラの子供たちは遅刻する者が多くなりました。小さな子供たちは足がいたいから学校に行くのはいやだと言いはじめました。親方のニジさんのお隣りに

キクさんという家があつて、そこにはケコと呼ぶ可愛らしい女の子が居りましたが、ケコちゃんも学校へ行く道が大へん遠くなつたのであの眼の大きな隊長さんをにくらしいと思ひました。新しい道にはすべり台にして遊ぶようになってごろの坂道ありません。のどのかわいた時につめたい水をのむ川もありません。いつもいつも兄さんのトシちゃんたちが遅刻をしないようにうしろからせきたてます。

もとの道は峠にのぼればすぐ眼の下に四角な学校の運動場が見下せたのに、新しい道はいんきな新しい坂道をのぼりつめても、長い間尾根道を歩かなければウジレハマの部落が見えて来ませんでした。いくら急いでも、学校の四角な運動場の見える所に来る頃にはもうみんな集つて朝礼を始めています。ケコちゃんはいつも悲しそうな顔をするようになりました。ケコちゃんの眼はあんまり大きいのでいつもびっくりしているようだとみんなに言われるのですが、その眼に涙を一ぱいためて或日受持のミエ先生に言いました。「先生たいちよさんにお願ひしてもとの道が通れるようにして下さい」

ケコちゃんの声はすきとおつてきれいで鈴みたいでした。ミエ先生はケコちゃんのおつむを軽く両手ではさんでこう仰言いました。「キク・ケコちゃん、へいたいさんはこの島をお守りしてくださいるのですよ。そのへいたいさんの何かの御都合でもとの道は通れなくなつたのですから、そんなに分らないことを言つてへいたいさんを困らせてはいけませんよ。ケコちゃんもつと元氣な強い子供になりましようね。新しい道は遠くていやでしょうけど、よくきいてごらんさい。珍らしい小鳥が一ぱいいますよ」

そしてケコちゃんをかかえあげてしっかりと抱いて下さいました。ケコちゃんは本当にやさしいいい先生だと思ひましたが、それでもやっぱりニジヌラの隊長さんにはにくらしいと思ひました。

そうして何日かは水のように流れました。ケウちゃんも毎日学校に通っていやな新しい道にもなれて来ました。なれてみるといろいろなよいところが見つかるようになりました。ミエ先生の仰言ったようにいろんな山鳥が囀っていました。もとの道の峠では見えなかつた遠い遠い島も見えました。

トシちゃんたち男の子は胸をふくらませて軍歌を勇ましくうたいました。その軍歌はトシちゃんたちがニジヌラの隊長さんに教わたつたのでした。それはトシちゃんたちが学校がひけてニジヌラに帰る坂道のことでした。ウジレハマの役場で用事をすませた隊長さんが一人ぼっちで峠道を上つて来ました。みんなはがやがやさわいでいたのに一べんに静かになつて立止りました。みんな隊長さんがこわかつたので早く先に行つてくれればよいと思つたのでした。すると隊長さんはこにこ笑つて敬礼をしました。

「ニジヌラに帰るんだろう。一緒に行こう」

隊長さんはこう言つてどンドン先に立つて歩き出しました。トシちゃんはどうしてだか分らないのに隊長さんが一べんに好きになりました。だからすぐ後につづいて歩き出すと他の子供もそろそろついでに来ました。

「みんなの通るみちを歩いて見たかつたのだよ」隊長さんは言いました。そして杖をふり廻しました。トシちゃんは思い切つて言つてみました。

「隊長さん、このみちはいやだよ。もとのみちを通して下さい」

すると隊長さんは一寸困つたような顔をしました。トシちゃんの顔をみるとこにこ笑つて別のことを言いました。

「キクくん、ぐんかを教えてやろうね」

そして大きな声で軍歌を歌い出しました。トシちゃんは隊長さんが自分の名前をどうして知っているのだろうと不思議に思いましたが、隊長さんはトシちゃんの左の胸の所にぬいつけてある白い布切れの名前を見たのでした。隊長さんは同じところを何べんも何べんも繰返してうたうのでトシちゃんたちはニジヌラに帰りつく頃迄にすっかり覚えてしまったのです。みんなが軍歌を覚えてしまうころは、すっかり隊長さんと仲良しになって隊長さんの上衣や軍帽や杖はみんなが一つずつ借りて身体につけて歩きました。

海の子供は海がすき——

と隊長さんがうたいました。トシちゃんたちはすぐにそのまねをしました。

うーみのこどもはうみがすき——

そして新しい道がこんなに近く思われたことは今までに一べんもなかったことでした。

そのころになると、ニジヌラのへいたいさんたちはお仕事に一段らくがついたらしく、あれこれと相談をしにウジレハマやニジヌラにやってくるようになりました。部落の人たちは、へいたいさんたちといろいろ話をしてみればちっとも恐い人たちがでないことが分かりました。それどころかへいたいさんたちはこの小さな南の島を守りに来て呉れたことが分り出したのです。部落の人たちはもとの峠道を通ってはいけなと言われたことで一途にかたい心になっていたのは間違いだということに気がつきだしました。そこで先ず、ニジヌラではニジさんの家で、へいたいさんの主だった人達を御馳走し

ようということになりました。

約束の時間になると、へいたいさんたちはニジさんの家に来て来ました。眼の大きな隊長さんもやって来ました。部落の方では、おじいさんやおばあさんはじめ赤ん坊にいたるまでみんなニジさんの家集って来たので、あるだけの部屋はみんなぶち通して使いましたがそれでも一ぱいになってしまいました。ケコちゃんも部屋の隅の方に居りました。はじめに部落の人たちが持寄った御馳走が並べられました。それはどれもこれも南のくにの珍らしい御馳走ばかりでした。おだんごのようなもの、山羊や鶏や豚の肉、みただけでもおながが一ぱいになりました。そのうちにソテツの実をかもして造った珍らしいお酒が出されました。お酒が出ると一座は一きわにぎやかになりました。隊長さんもその他のへいたいさんもみんな大機嫌なのをみて親方のニジさんはじめ部落の人たちはみんなよろこびました。

ケコちゃんのお父さんのキクさんは、頃合を見はからって三本の絃のある蛇の皮の楽器をならしはじめました。すると部落の人たちはそれに合せてみんな歌い出しました。それはとても不思議な音色でした。

千年も万年も見たことのないふかしぎなくじらがやって来た、いやそれはくじらではないよ、みんなの島を守りに来たふねだよ——

少しも意味は分らないのですが、こんなふういききとれました。これはへいたいさんたちを歓迎す

るうたなのです。

それがすむとその楽器はいかにも悲しいあわれな調子に変わりました。すると今度は一人だけでうたう者がありました。それをきいていると、ずんずんそのうたの中にひきいれられていくような気がしました。その歌はこの島に古い古い昔から伝わって来た可哀そうな奴隷娘をうたったものでした。その奴隷娘はきりょうよしのやさしい娘でしたが、ただ身分が奴隷であつたばかりにみんなにいじめられてとうとう死んでしまったのでした。

庭は段々うす明りになって仏桑花がほの白く匂っているようでした。東の山の端におそいお月様が出て来たのです。その頃になると浜辺はだんだん干潟になって高い潮の香が入江一面にたちこめて来ました。「ほっほっほっ」とにぎやかなかけ声がかかります。部落の人がそれに合せてこっけいにおどるとその次にへいたいさんの方に所望の聲がかかります。先ず隊長さんが引ばり出されて座の真中におどりました。それこそでたらめおどりです。べつのへいたいさんもおどります。ニジさんもおどります。みんなおどって一しきり大笑いしました。

そしてその晩はすっかりひいてしまった干潟の中をへいたいさんたちは、ひよろ長いかげをひいて兵舎のある方に帰って行きました。

その頃はお月様は中天の雲の中を走っていました。ケコちゃんはお家に帰ってとこの中にはいつてからも隊長さんやみんなのでたらめのおどりがおかしくて仕方がありませんでした。そしてへいたいさんたちがみんな本当にやさしそうなのでとても安心をしました。

お庭では虫の鳴くこえがします。ケコちゃんの寝ているゆかの下でも小さな虫がないようない

のです。

それからウジレハマの入江には風が吹いて波が立さわいだ日もありました。もやがあしのめみたいに立ちこめてまるでみずうみのように静かな日もありました。

ずっとずっとみなみの方の島ではありましたが、それでも冬の日には寒くて木の芽は赤くしもやけのようにちぢこまって居りました。

キク・ケコちゃんは早く春がやって来てのびのび出来たらよいのにとどんなに思ったことでしょう。それに冬の日はいくじく雨ばかり降り続けました。学校に通う道は谿川のように水が流れました。

それでも、ケコちゃんはちつともいやではありませんでした。寒い晩でも少しもさびしくはありませんでした。というのは、ケコちゃんはすっかりニジヌラの隊長さんとお友達になることが出来たからです。そのはじまりは——ニジヌラのたのしい一晚のもようがウジレハマに伝わって来ると、ウジレハマの方でも早速へいさんたちとお友達になろうと、大親分のカツさんが役場のお役人たちと相談してウジレハマの学校で学芸会を開いてへいさんたちを招待したのです。ケコちゃんはウジレハマのミエ先生の家に三日のあいだ泊ったきりで、学芸会のお稽古をしたかいがあって、へいさんたちの間で一ばん評判がよかったです。

そうしてその次の日の夕方枇杷の木でつくったステッキについて、

「キク・ケコちゃんのお家はここですか」

と隊長さんが訪ねて来ました。隊長さんはケコちゃんには、クレヨンを、トシちゃんには笛をごほ